

来している活動期胃潰瘍 3 例および潰瘍型胃癌 2 例ではこの潰瘍部に一致した明瞭な陽性集積像を飲水後でも長時間認めた。一方、治癒期 4 例では胃壁に軽度集積したのみで粘膜欠損のない陥凹部は描画されなかった。

すなわち、本法は Sucralfate が粘膜欠損部に飲水後でも長時間付着している様子を臨床的かつ非侵襲性に把握できる簡便な方法と考えた。今後、症例を重ね本薬の付着状況と治療効果の関係などを検討したい。

5. 腎腫瘍の骨シンチグラムの検討

篠原 照彦 (国立水戸病院・放)
高橋 徳男 (国立水戸病院・泌)

1987 年 1 月から 1990 年 12 月までの 4 年間に 1831 件の ^{99m}Tc -MDP 全身骨シンチグラフィを行った。泌尿器疾患は 549 件ありその中、腎腫瘍は 86 件 33 症例であった。患者は男子 18 名、女子 15 名、初診患者は男子 15 名、女子 10 名で、8 名は再発または他院で治療後の症例であった。初回シンチ時、複数骨に所見を認めた例は 11 例、1 骨に複数所見を認めた 2 例、1 骨に 1 所見 3 例、計 16 例 (44.5%)、所見なしは 14 例 (42.4%) で、胸骨の判定不能例が 3 例あった。所見のあった骨は椎骨 9、胸骨 7、肋骨 5、腸骨 5 など扁平骨に多い傾向がみられた。骨転移を初発症状とした例は 1 例であった。 ^{67}Ga の集積は顕著に認められた例と認められない例とあった。小病変が多く解像・分解能も関与しているように思われた。胸骨の生理的摂取、微細な病変と変形性腰椎症との鑑別などに注意を要した。疑陽性、疑陰性の検討に生検は行わず、 ^{67}Ga 摂取・他の検査などによった。骨転移率が比較的高く、ルーチン検査としての意義は高いと思われた。

6. 放射線治療前に正常集積を示した骨転移巣に生じた“flare”

井上 優介 百瀬 敏光 小坂 昇
西川 潤一 佐々木康人 (東大・放)

悪性腫瘍の骨転移巣の治療後早期に、治療が奏効したと思われるにもかかわらず、骨シンチ上では悪化したかのような像を呈することがあり、“flare”として知られている。

今回われわれは、骨シンチ上正常集積を示した骨転移

巣に放射線治療を行った 3 例について検討した。治療は奏効したが、治療開始から 1 か月から 3 か月後に再検査された骨シンチでは、全例に骨転移巣に一致した集積増加が見られ、一種の“flare”と考えられた。この集積増加の原因としては、腫瘍の発育が抑えられたことによる造骨活性の亢進が考えられたが、治療効果が十分出るまでの骨破壊の進行を見ている可能性も示唆された。

7. Hypereosinophilic Syndrome (HES) の 1 例

西巻 博 石井 勝巳 中澤 圭治
依田 一重 西山 正吾 片桐 科子
穂坂 茂 (北里大・放)
(同・内)

Hypereosinophilic syndrome (HES) は多臓器に好酸球の浸潤を認める原因不明でまれな好酸球増多症である。今回われわれは、多臓器への浸潤を ^{67}Ga シンチグラフィをはじめとする各種放射線検査にて追跡し得た 1 例を経験したので報告する。症例は 40 歳、男性、約 25 年の現病歴があり、生検にて直腸および皮膚、心筋、肺、後腹膜、膀胱への好酸球の浸潤が確認された。 ^{67}Ga シンチグラフィにおいて、後腹膜病変に集積増加が認められたが、治療によって速やかに集積は消失した。しかし、膀胱への浸潤には集積増加は認められず、 ^{67}Ga の集積が認められないことで、好酸球の臓器浸潤を否定できなると考えられた。

8. 頭蓋内腫瘍で発症し ^{131}I 治療と放射線外部照射が奏効した甲状腺濾胞癌の一例

日下部きよ子 有竹 澄江 中野 敬子
牧 正子 太田 淑子 丹下 正一
近藤 千里 (東京女子医大・放)

甲状腺濾胞癌の骨転移は放射性ヨウ素を取り込んでも効果は一時的で 5 年以上の生存期間を得ることは難かしい。われわれは頭蓋内の巨大腫瘍にて発症し骨および肺に多数の転移のある濾胞癌の一例に総計 550 mCi (20.3 GBq) の ^{131}I を投与し、さらに 4 か所の転移腫瘍に放射線外部照射を施行して著効を得たので報告する。症例は 20 年前に甲状腺腫瘍摘出の既往歴を有する 53 歳の女性である。多発性髄膜腫と診断され開頭術が試みられた。